

「安心」の信号機 体験

音とLED 弱視者に配慮

弱視者らに配慮した信号装置「高齢者・視覚障害者・盲ろう者用LED（発光ダイオード）付き音響装置」の体験会が17日、横浜市神奈川区の反町公園と「はーと友神奈川」で開かれた。一般の人や視覚と聴覚の両方に障害がある盲ろう者ら約100人が集まり、見えやすい信号機を実感していた。

横浜で100人参加

者、ろうあ者約10人に体験してもらった。

視覚と聴覚の障害を

開発したのは大阪の電気機器メーカー「篠原電機」。横断歩道を渡る手前に設置され、高さは子どもや車いす利用者に配慮して約120センチと低い。既存の歩行者用信号機と連動し、装置の両面に付いているLEDのライトが赤と青に点灯する。2012年に大阪市内に初めて設置された。県内にはまだなく、設置数は全国的にも十数カ所と少ないが、弱視者らからは設置を望む声が高まっている。

もつ座間市の堀江昭一さん(66)は「自宅の近くに車がよく通る道路があり、横断歩道を渡る時はいつも命がけです」と話す。2人くらい先は見えず、音が遠いと聞こえない。いつも

周囲の人が渡り出す気配などを察知して渡るという。「少しでも安心して外を歩けるよう、こういう信号機が広まってほしい」と願う。

一般的歩行者用信号機は横断歩道を渡ったところにあり、高齢者や視覚障害者には非常に見えづらい。太陽光などで全く見えないこともあり、信号の青色表示を音で知らせる「音響信号機」もあるが、近隣の騒音になるとして早朝や夜間には止められてしまう。音響装置がない信号機もある。昨年12月には、東京都内で視覚障害のある60代の男性が横断歩道で車にはねられ、死亡する事故もあった。当時、信号は赤で、青信号を音で知らせる装置は早朝のため止められていたという。今回の信号装置では、音響装置の停止時間でも押せば音が鳴る。

篠原電機によると、大阪市内でこの装置を設置する前後の時期に、歩行者と自転車の事故件数を比べたところ、半減した横断歩道もあり、渡る手前に信号があるため赤信号に変わる直前に無理に渡る人も減ったという。



横断歩道の手前に設置された信号装置のライトと音で渡る堀江さん＝横浜市神奈川区で

同社の篠原基一郎社長は「ハンディキャップがある方々が安心して外出できるよう、この信号機を普及させたい」と語る。